

四面楚歌 時利あらず

① 項王の軍垓下に壁す。
は 立てこもった

② 兵少なく食尽く。
は 尽きた

③ 漢軍及び諸侯の兵、之を囲むこと数重なり。
は 包囲する
は であつた

④ 夜漢軍の四面皆楚歌するを聞き、項王乃ち大いに驚きて曰はく、
で が をうたっているの
そこで 言うことには

⑤ 「漢皆已に楚を得たるか。⑥ 是れ何ぞ楚人の多きや。」と。
の軍は 既に 手に入れたの
これ と が 多い ことよ
詠嘆

⑦ 項王則ち夜起きて帳中に飲む。
は 本陣の で (決別の) 酒宴を開いた
が いて
⑧ 美人有り、名は虞。
であつた

⑨ 常に幸せられて従ふ。
項王に 愛さ れ 項王に 従っていた
が
⑩ 駿馬あり、名は騅。
といった 項王は
⑪ 常に之に騎す。
これ 乗っていた

⑫ 是に於いて項王乃ち悲歌忼慨し、自ら詩を為りて曰はく、
そこで は しみい 憤り嘆いて 作つ いうことには

⑬ 力 山を抜き 氣世を蓋ふ
私の力は 覆った

⑭ 時利 あらず 驢 逝かず
運は 不利で 進まない

⑮ 驢の 逝かざる 奈何すべき
が 進まない のは どう か

⑯ 虞や虞や 若を奈何せん と
よ よ おまえ どう しようか

⑰ 歌ふこと数回、美人之に和す。⑰ 項王 泣数行 下る。
歌う 回 は この歌 応える詩を作り は を すじながした

⑱ 左右皆泣き、能く仰ぎ視るもの莫し。
の臣下は 項王を 見る ことのできる は 者 いなかった

項王の最期

① 是に於いて 項王乃ち東のかた烏江を渡らんと欲す。
そこで は 方 の 渡ろ う した

② 烏江の亭長、船を櫂して待つ。
宿場の は 用意し 待っていた

③ 項王に謂ひて曰はく、「江東小なりと雖も、地は方千里、
向かつ 言うことには は 狭い いても 土地 四方あり

衆は数十万人、亦王たるに足るなり。
民衆 いる また ある の 十分 です

④ 願はくは大王急ぎ渡れ。 ⑤ 今独り 臣のみ船有り。
どうか 様よ 急いで 渡つて下さい ただ 私 だけ が を 持っています
※ク語法【体】＋ク (船を)

⑥ 漢軍至るも、以つて渡る無し。」と。
が 到着して 使つて ことは できません

⑦ 項王笑ひて曰はく、「天の我を亡ぼすに、我何ぞ渡ることを為さん。
いや、渡りません

⑧ 且つ 籍は江東の子弟八千人と、江を渡りて西す。
それ以前 若者 渡つ 西に向かった

⑨ 今一人の還るもの無し。
ところが 帰った者 はない

⑩ 縦ひ江東の父兄 憐れみて我を王とすとも、我何の面目か
たとえ 子弟の 保護者 同情し したとしても 私 ほんな 会わせる 顔

ありて之に見えん。
あつ 保護者 お目にかかることができようか(いや、できない)

⑪ 縦ひ 彼 言はずとも、籍独り心に愧ぢざらんや。」と。
たとえ 江東の父兄 同情して何も 言わなくても 私 どうして 恥 ないことがありますか (いや、恥に思います)

⑫ 乃ち 亭長に謂ひて曰はく、「吾公の長者たるを知る。
そこで 宿場の 向かつ 言うことには 私 あなたが 徳の高い人 である 知っている

⑬ 吾 此の馬に騎すること五歳、当たる所敵無し。
私 こ 乗る 年間 向かう だった

⑭ 嘗て一日に行くこと千里なり。
かつて 走る であつた

⑮ 之を殺すに忍びず。
この馬 のが 我慢でき ない

⑯ 以つて公に賜はん。」と。
この馬 を あなた 与えよう

そこで騎馬兵に
⑰乃ち騎をして皆馬を下りて歩行せしめ、短兵を持して接戦す。

⑱独り項王の殺す所の漢軍、数百人なり。

⑲項王の身も亦十余創を被る。

⑳顧みるに漢の騎司馬呂馬童を見たり。

項王が
曰はく、「若は吾が故人に非ずや。」と。

馬童は
之に面し、王翳に指して曰はく、「此れ項王なり。」と。

項王乃ち曰はく、「吾聞く、漢我が頭を千金・邑万户に購ふと。

吾若が為に徳せしめん。」と。乃ち自刎して死す。

使役 項王が漢に馬童に対して賞金を施させる